

ワイルドエリアは危険。

だから決して立ち入ってはならないという警告が、行くなれば準備を忘れずにという忠告に変わったのは、自身の成長が、周囲の人々の考えに変化をもたらした結果だ。ポケモントレーナーにして、気鋭のポケモン博士の助手。それが現在のホップの立場である。

パワースポットの観測やポケモンの生態調査には慣れつつあるが、ワイルドエリアでは一瞬の気の緩みが事故につながりかねない。自分自身とポケモンを危険から遠ざけるには、薬や道具はもちろん、正確な知識と情報が必要なのだ。

スマホロトムのアプリを立ち上げる。現地の天候や地形を頭に入れるところから、調査は始まるのだという師匠の言葉と同時にホップが思い浮かべるのは、地図を理解できるリザードンの姿だ。

牧場で働くするワンパチや、空飛ぶタクシーで活躍するアーマーガアは、トレーニングのノウハウが確立されているが、カントー御三家に数えられるヒトカゲは、一般的にバトルに適したポケモンと考えられており、道案内や誘導を任されることも少ない。方向音痴の相棒を目的地に連れて行くという使命感に寄り添い、導いたソニアの優しさと聡明さを、ホップは折に触れて実感するのだった。

だが、エンジンシティからワイルドエリアに向かって

いるはずの師匠は甘くはない。調査に向けてホップが気持ちと表情をわずかに引き締めたとき、列車が揺れ、緩やかにスピードを落とした。

「おや、何があったのかな」

ガラル地方では、交通機関の遅延や運休が毎日のように発生する。とりわけワイルドエリアの天候やポケモンの影響を受けることが多いのが、ガラル鉄道だ。乗務員はもちろん、乗客も路線トラブルには慣れており、表情には余裕すら漂っている。

「ポケモンの大移動に巻きこまれたのなら、ぜひ写真を撮っておきたかったのだけど」

「遅刻の理由も証明できるね」

居合わせた人々のやりとりを聞きながら、ホップは窓の外に視線を送った。傷ついたポケモンが見当たらないことに、ひとまず安堵する。電車を止めるような集団行動も起きていないようだ。

警戒をあらわにするものや、好奇心を示すものに見守られながら、四両編成の電車は雨上がりの草原を進んでいく。

『ワイルドエリア線は安全確認のため全面運休』

電光掲示板に表示されたメッセージは、ホームに降りた人々を落胆させた。改札に向かう流れに乗ったホップの耳に、アーマーガアの鳴き声が飛びこんでくる。空飛ぶタクシーのおかげで、ガラル地方の人々は交通機関の

運休というアクシデントに直面しても、平静を保つことができるのだった。

「お待たせ、ソニア」

「気にしないでいいわよ。遅れた分は、しっかり働いてもらうから」

冗談と本気が混ざった笑みが、ソニアに浮かぶ。感情が豊かで切り替えが得意な彼女のことで、ひとたび調査を始めれば、弟子の遅刻など頭から抜け落ちてしまうことだろう。

ガラル地方のポケモンの巣穴は、W（ワット）と呼ばれるエネルギーを放出している。ホップとソニアの目的は、Wの観測と採取だ。ポケモンや自然環境に与える影響が少なく、新時代のエネルギーとして活用が期待されていたが、ブラックナイト以後、放出量が増大したために、安全性を問う声が高まった。Wを道具に交換することで、エネルギーの採取を推進していたポケモンリーグも例外ではなく、ホップがソニアへの弟子入りを決意した直後に、研究所に調査を依頼したのである。

「ブラックナイトの直後みたいに、出てくるWの量が大きく変わることってあるのかな？」

「もちろん、ありえるだろうけど、時期についてはつきりしたことは言えないわね。それは百年後かもしれないし、千年後かもしれない」

「スケールが大きすぎるぞ」

ホップは頭を掻いた。歴史や考古学を学んでいるおかげで、千年前のガラル地方は臆気ながら想像できるものの、遠い未来はまったくイメージできない。ガラル地方のエネルギー問題を案じるあまり、ローズ元委員長は行動を起こしたが、その主張に賛同することはおろか、同じ視点を持つことすら困難に思える。

「大地の底なら、一年の違いなんてたいしたことじゃないけど、地上はそうじゃない。早いところデータを集めるわよ」

ミロカロ湖の南で、二人の足は止まった。橋の上に円錐形のコーンが並び、黄色と黒に塗られたバーが湖から吹く風に揺れている。

「現在、巨人の腰掛けは立ち入り禁止です。迂回してください」

「電車が止まったのに関係あるのかな？」

トサキントが水上にツノを突き出しながら、湖を滑らかに泳いでいる。野生のポケモンは、リーグスタッフの指示に従う気はないようだ。

「こんにちは。何があったんですか？」

問いかけられたリーグスタッフは、心持ち背筋を伸ばしたように見えた。

「崖崩れです。ほら、あそこ」

上げかけた悲鳴ごと、ホップは息を呑んだ。崖の斜面が傷口のような斜面を晒し、彼の体ほどもある巨大な岩

や、砕けた石が地面に散っている。リーグスタッフは巨人の腰掛けへの立ち入りを制限したものの、現場の状況確認や、救助活動にまでは手が及んでいないようだ。

鉄に似た匂いが、鼻を突く。ホップが口を開きかけたとき、ソニアは既に行動を起こしていた。ネイルを施した指が、襟を摘み上げる。

「わたしたちはポケモン研究者です。お手伝いできることはありますか？」

「それでしたら、ポケモンの救助を。まだレスキュー隊が到着していないんです」

リーグスタッフはサングラス越しに安堵を示した。ワイルドエリアを知り尽くし、トレーナーやポケモンの救援を仕事とする大人が信頼を寄せる知識の持ち主が、ポケモン博士なのだ。その象徴とも言える白衣を追いながら、ホップは橋を渡る。

「ワイルドエリアで事故や災害に巻きこまれた場合は、リーグスタッフの指示に従うようにジムチャレンジの資料に書いてあったけど、こんなことが起きるなんて、想像もしてなかったぞ」

「そのうちにホップも慣れるわよ。大事なのは、常に安全を確保すること。それから、冷静でいること。周りが見えてないのに行動すると、自分や仲間が危ない目に遭うから、気をつけてね」

植物を思わせる緑の輝きが、ホップに過去の騒動を蘇

らせる。伝説のポケモンを助け、認められたとしても、彼が傷つけば周りの人々が悲しむのだ。

まずは自分の身を守る。それを骨身に染みこませるように、ホップは両手で頬を叩いた。

「ソニア博士とホップさんですね。ミロカロ湖の担当者から連絡は受けています。こちらへどうぞ」

リーグスタッフの一人が、ソニアに声をかけた。

「崖崩れに巻きこまれたのは、野生のポケモンだけですか？」

「トレーナーの被害状況は、今のところ不明です。ガラルの成人ならば、誰でもワイルドエリアに入ることができそうですからね」

頷いたソニアの視線が、後方のホップを撫でた。彼女を見据えながら、ホップは大きく頷き返す。生命の終わりに、時として目を背けたくないような形があることを、彼は知っていた。

「わたしたちは現場の捜索にあたります。ロトムは上から現場の撮影を。頼んだわよ」

「任せるロト！」

ソニアの指示でスマホロトムが空に飛び出し、ワンパチが気合の声を上げた。

「ホップは、いつでもポケモンが出せるように準備しておいて」

「分かった」

ポケモンの力を借りるのは、土砂の下で助けを待つ誰かを助けるためかもしれないし、ホップたちが危険から逃れるためかもしれない。掌にわずかな湿り気を感じながら、ホップはモンスターボールに手を伸ばした。

「行って、ワンパチ」

ワンパチの体が、岩の隙間を通り抜けた。日頃、おやつを食べ過ぎを叱られているとは思えないほど、動きは軽い。ホップとソニアに見守られながら、ワンパチは割れた岩の前で足を止め、甲高く吠えた。

「そこに誰がいるのね？」

「手伝ってくれ、カビゴン」

カビゴンが持ち上げた岩の下から、傷だらけのワンリキーが現れた。緩やかに上下する胸が目に入り、ホップは安堵する。

「聞こえるか、もう大丈夫だぞ」

全身がぎずぐすり塗れになっても、ワンリキーに反応はない。ソニアの決断は早かった。

「救護テントに運んだほうがいいわね。ホップ、連れて行ってあげて」

「分かった！ カビゴンは、ソニアの手伝いを頼む」

伝説のポケモンを担架代わりにしたのは、おそらくガラル地方ではホップが初めてだろう。ザシアンは飛ぶように地面を駆け、白い屋根にポケモンリーグのロゴが描かれた集会用テントの前で立ち止まった。

「このワンリキー、意識が戻らないんだ。手当をお願いします」

救護テントのスタッフは、ザシアンの姿に大きく目と口を開けたが、一瞬で驚きを飲みこんだ。相棒のキテルグマとともに、慣れた手つきでワンリキーをシートに寝かせる。

「レスキュー隊が携帯用の回復マシンを運んでくれる。このワンリキーの体力ならば、それまで持ちこたえられるだろう」

「レスキュー隊って、いつごろ到着するんですか？」

「エンジンシティを出たと聞いているから、もうすぐ来るはずだ」

ホップは全身で息を吐いた。ひとまず、一つの命を救えたことに安堵する。現場に引き返そうとする彼を、スタッフ呼び止めた。

「ホップ選手ですよね、ソニア博士の弟子の」

差し出された紙コップを、ホップは礼を言いながら受け取った。紅茶の湯気が、喉の渴きを自覚させる。

「お兄さん、さっきザシアンを見てビックリしてただけだけど、試合見てるんですか？」

「たまにね」

習慣と化したつつある観察と考察が、ホップの頭に疑問を広げる。なぜ男はガラルスタートーナメントの常連であるダンデやユウリではなく、ソニアの名を口にしたの

か。

「もしかして、ソニアの知り合いですか？」

低い声で問いかけながら、心持ち姿勢を正す。ホップの内に根付いているのは、師匠の知人に失礼があつてはならないという弟子の心構えと、ソニアに怪しい男を近づけまいとする使命感だ。

「彼女は僕を覚えていないだろうから、知り合いとは言えないかな」

「会ったことがある人なら、ソニアはちゃんと覚えてると思うんだけどな」

崖崩れの現場に視線を向けると、地面の匂いを辿るワンプアの側で、ソニアが膝を付いていた。

「昔のワイルドエリアは、人の手が入っていなかったからね。今よりもずっと、災害や事故が多かった。近くにいたジムチャレンジャーに、救助の手伝いを頼んだこともある」

ホップのイメージよりも、男は年齢を重ねているようだった。頭のなかで、単語がパズルのように組み立てられていく。

「それが、ソニアなのか……」

「当時の僕はワイルドエリアに配属されたばかりで、彼女には何度が助けられたよ」

人間とポケモンが等しく自然の驚異に晒されていた過去のワイルドエリアは、ホップにとって知識であり、記

録である。だが、目の前のソニアやスタッフ、そしてポケモンリーグのトップに立つ実兄にとっては、他者と共有する記憶であり、体験なのだ。

「うん。ワンプアの鼻は、衰えてないようだ」

満足げな呟きに、ワンプアの鳴き声が重なる。ドミラーの薄い体は、災害の現場から救出されたというよりも、遺跡から出土したように見えた。

「お手柄だぞ、ワンプア」

走り寄ったホップに、ワンプアが誇らしげな顔を向ける。だが、手のなかのドミラーを見つめるソニアの表情は険しかった。

「オレが救護テントに連れて行こうか？」

提案したものの、金属の体に傷らしいものは見当たらない。答えずにしゃがみ込んだソニアの爪のエメラルドグリーンがホップの視界を彩った次の瞬間、ドミラーの体が地面に吸い寄せられ、反発する磁石のように高く浮き上がった。

「急に何やってるんだ？」

「このドミラーのとくせいは、ふゆう。間違いないわね」

ソニアの目に、研究所で仮説を立てているときと同じ光が宿った。次に来るものを予想して、ホップは静かに身構える。

「ホップ。ふゆうの特徴を説明できる？」

「浮いているから、じめんタイプのわざを受けないだろう。それから、どくびしとまきびし、ねばねばネットも効果がない」

「ほかに？」

「ディグダやダグトリオのとくせい、すながくれも効かないから、ピンチのときに逃げられる」

ホップの知識を称えるように、ドーミラーが全身を輝かせた。その光が、スタジアムの地面を駆け巡った稲妻を思い出させる。

「それから、フィールドに影響するわざの影響も受けない」

「うん、上出来」

ソニアの表情がほんの少し和らいだが、ホップは警戒を緩めなかった。質問は、まだ終わってはいない。

「じゃあ、ふゆうしているポケモンに、すなかけ以外のじめんタイプのわざを当てるにはどうする？」

「オレなら、わざを使うぞ。じゅうりよくとか、うちおとすとか」

日夜、バトルタワーで勝負の可能性を追求しているダンデやユウリならば、ホップが思いつかなかった答えを引き出すかもしれない。だが、ソニアが弟子に求めているのは、奇想天外なアイデアでなかった。

「このドーミラー、落ちてきた岩にぶつかったのかもしれない。うちおとすは、いわタイプのわざだもの」

「地面に落っこちて動けなくなって、土に埋まったんだな。大変だったな、オマエ」

劣るように、ホップはドーミラーを撫でた。

「どうして、そんな崖崩れが起きたのかしら？」

腰掛けに例えられる巨岩を見つめながら、ソニアは考えこんでいる。明るい色の髪を指で弄ぶのは、彼女の癖だ。

「地震が起きて……」

言い終えるよりも早く、ホップは首を横に振った。彼が気付いていなかったとしても、ガラル地方がワイルドエリアの災害を放置することはありえない。スマホロトムは、バッグのなかで眠るように過ごしていたから、災害に関するニュースはなかったものと判断できる。報道機関のコンピューターがハッキングを受けて情報が遮断されるのは、ドラマや映画の世界だけだ。

「この崖崩れが自然に起きたものじゃないなら、ポケモンの仕業ってことになるぞ」

「そうだね。自然現象じゃないから、ポケモンがやったこと。そこまでは正しいわよ。人工地震なんて言われたら、これからの教育方針を本気で考え直してたもの」

ワイルドエリアは厳しい場所だ。だからこそ、ポケモンが自らの縄張りを壊すような行動を取るとはホップには思えない。頭に浮かぶ光景は、スタジアムで繰り広げられた試合ばかりだ。

「カイリキーがじしんを使えるってことは、ワンリキーやゴリーキーにも使えるよな。それからドロバンコにバンバドロ、ゴビットにゴルッグ。このエリアのポケモンが、みんな怪しく思えてきたぞ」

頭を抱えるホップの視線の上で、ドーミラーが表情を曇らせた。ミステリならば、犯人が被害者を装うこともあるかもしれないが、生存競争の場では無意味だ。ドーミラーを安心させるように、ホップは手を伸ばす。

「大丈夫だ。オマエが犯人じゃないことは、ちゃんと分かっている。わざレコードを使わないと、ドーミラーはじしんを覚えないんだから」

ドーミラーの顔に安堵が浮かぶ。同時にホップが思い浮かべたのは、救護テントに運んだワンリキーだ。ワンリキーとその進化形は、わざレコードを使わなければじしんを取得できない。

「それだよ！ ポケモンがじしんを使ったとしても、レベルを上げた覚えたわざだとは限らない。わざレコードを使った可能性だってある」

再び疑いの目を向けられていることに気付いたのか、ドーミラーがソニアから距離をとった。彼女は他人とのコミュニケーションではなく、自身の思考をまとめるために、言葉を発している。助手にできることは、ささやかな手伝いだけだ。

「でも、わざレコードやわざマシンは、ポケモンには扱

えないぞ。野生のポケモンが、巢にあったわざレコードを偶然動かしてじしんを覚えるなんて、そんなことがあるのかな？」

「そうだね。野生のポケモンなら、まずありえない」

ソニアの言葉が、ホップの耳と心を引っ掻いた。小説ならば、単語が太字で強調されていたに違いない。

「野生のポケモンにできないのなら、トレーナーがいるポケモンがやったってことになるぞ」

「それを確かめるためにも、もっと情報が欲しいわね」
持ち主の呟きを聞きつけたかのように、ロトムが甲高い声を上げながら戻ってきた。

「お疲れさま、ロトム」

画像を確認するソニアの顔を眺めながら、ホップは唇の渇きに気付いた。ワイルドエリアに出入りするトレーナーが、手持ちのポケモンに強力なわざを使わせることは珍しくはない。崖崩れを引き起こし、野生のポケモンを巻きこんだという事実は重いが、トレーナーが厳罰を受けることないだろう。

だが、もしも故意だとすれば。ポケモンを苦しめ、傷つける行為を、ホップは許せない。だが同時に、のどかなハロントウンで育った彼にとって、犯罪は現実味が薄かった。

「もし、崖崩れがトレーナーの仕業だとしても、それを調べるのは警察の仕事だろう」

現実にはサスペンスドラマではないのだから、ポケモン博士とその助手に出番はないだろう。そんなことを考えたホップの頭上で、アーマーガアの鳴き声が響いた。制服を着たパイロットが、着陸の指示を出す。警察とレスキュー隊が到着したようだ。

「ソニア、警察とレスキュー隊が来たぞ」

スマホホルトムの画面に見つめたまま、ソニアが軽く首を振る。レスキュー隊が捜索活動を始めても気に留めなかった彼女は、聞き慣れた、しかし予想外の羽ばたきが耳に飛びこんできたときに、ようやく顔を上げた。

「ダンデくん、どうしてここに？」

警察官に誘導されて巨人の腰掛けに降り立ったのは、ホップとソニアがよく知っているリザードンだった。相棒の男は、現役時代のユニフォームに身を包んでいる。「オレは視察に来たんだ。途中で、警察の皆さんと待ち合わせてな」

「うん、その判断は間違っていないと思うぞ」

ホップの言葉に、ソニアとリザードンが静かに大きく頷いた。ワイルドエリアを管理しているのは、ガラル地方のポケモンリーグだ。そのトップであるダンデが災害の現場に駆けつけるのも、彼の性格を考えればおかしいことではないだろう。エンジンシティ付近での合流を提案したポケモンリーグと警察の尽力に目を向けられるようになったのは、ホップの成長の証かもしれない。

「アニキ。頼むから迷子にならないでくれよ」

「みんながいるから、心配ないぜ」

少なくとも、行方不明者のリストに兄の名が追加されることはないだろう。ダンデの信頼に応えるように、ワンパチが元氣よく鳴いた。

「ソニアとワンパチがここにいるということは、このエリアの捜索活動はほぼ終わっているんだろう？」

おそらくダンデは、持ち前の観察力ではなく、時間をかけて培われた信頼と実績によって、現場の状況を把握したのだろう。首を縦に振るリーグスタッフとは対照的に、警察官は驚きを示している。

「ご協力、ありがとうございます。後でお話を聞かせてください」

ローズ委員長が起こした騒動の後、警察の事情聴取を受けたことを思い出して、ホップは頷いた。

「その前に、皆さんに見てもらいたいものがあります」

拡大された写真の中心で、小さいが鮮やかなピンクが存在を主張していた。専門家でなくても、岩石や地面の色ではないことは理解できる。

「誰かの悪戯かな？」

スパイクタウンで目にした落書きを思い出し、ホップは顔をしかめた。ピンク色の円の内側には、二回りほど小さな円が描かれていたように思える。推測の域を出ないのは、右半分が自然の力でもぎ取られていたからだ。

「ねらいのまとか……？」

「アニキらしいな」

ダンデの指摘通り、色を黒く塗り替えれば、タイプ相性を無視してポケモンに攻撃を命中させることができる道具に見える。

「このマークは、本当に的だったのかもしれないわね」

「考えすぎじゃないのか？ 広い地面にわざを当てるのに、的な必要ないだろう」

野生のポケモンにとって、餌や敵にわざを当てる力は生きる力でもある。トレーニングが生態に組みこまれているポケモンならば、的を使った訓練を行ってもおかしくないだろう。だがホップには、巨人の腰掛けに残った痕跡がポケモンの鍛錬の成果だとは思えなかった。濃いピンクとえぐり取られた地面の組み合わせは、不吉にすら感じられる。

「そうだね。ポケモンバトルだったら、じしんは必ず当たる。的を狙う必要はない」

「こうやって崖崩れに巻きこまれたように見えるのは、ただの偶然じゃないか？」

常識や思いこみが、発想を縛ることもある。ホップにそれを教えたのは、他ならぬソニアだ。だが、険しい顔でスマホロトムを操作する彼女は、ポケモンが起こした崖崩れに人間が関わっていると考えて、決定的な証拠を探しているように見える。

「それを確かめるためにも、写真の場所に行ったほうがいいんじゃないか？」

提案したダンデに、人間の視線が集まった。スマホロトムが撮影したエリアは、崖崩れの影響が大きく、ソニアやリーグスタッフによる搜索が及んでいない。持ち場に着いたレスキュー隊員の背中を見送り、ホップは不安げな視線を兄に送った。

「リザードンで空から行けば、レスキュー隊の邪魔にはならないだろう。ホップ、アーマーガアは連れて来ているか？」

「ああ、もちろんだぞ」

ホップは頷きながら、モンスターボールに手を伸ばした。大きな体を持つひこうタイプのポケモンが二体いれば、現場で傷ついたポケモンや人間を見つけても、速やかに助け出せるだろう。

「行きましょう。リザードン、ダンデくん、お願いね」

ソニアの呼びかけに応えるように、リザードンが短く鳴いた。

「もちろん、現場の物に触れたりはしません。救助活動が必要な場合以外は」

面倒がりながらも、ソニアは調査に必要な手続を決して疎かにしない研究者だ。礼を尽くした態度とダンデの存在に効果があったのか、警官が彼女を止める様子はない。

「頼んだぞ、リザードン」

リザードンは地面を蹴った。大人二人分の重量をものもしない力強い姿に、警察官から感嘆の声が上がる。

巨人の腰掛けの南側の崖に、ピンク色の円は描かれていた。血を連想させる赤ならば、生息するゴーストポケモンの悪戯として処理されたかもしれない。

「ゴーストポケモンが、こんなに大人しいなんて」

「彼らは人を驚かせるのは好きだが、驚かされるのは得意じゃないからな」

ゴーストタイプของ わざに弱いゴーストポケモンたちの見えない視線を受けながら、リザードンとアーマーガアは中空で静止した。

「ゴーストポケモンが、オレたちの前に姿を現さないということは、生き埋めになった仲間はいないということじゃないか？」

「ゴーストポケモンが生き埋めというのも、おかしい話だけど、本格的な救助活動は、レスキュー隊に任せるしかないわね」

ソニアが肩をすくめる。ポケモンたちの下に広がる台地は岩石と土砂に埋め尽くされており、不用意に踏み込めば足を傷つけかねない。

「リザードン、もう少し下がって。そう、それぐらい」
わずかに高度を下げたリザードンから、ソニアは身を乗り出した。オレンジ色の髪が重力に従う。体が地面に

落ちないように、ダンデが後ろから腰をつかんだ。

ユウリが大きく目を見開いて、悲鳴を上げそうな光景も、ホップには見慣れたものだ。危険な場所で体を支えるのは、二人には当然のことである。

ダンデとソニアの距離感以上に、ホップの心に突き刺さるのは、兄の筋肉だ。伸び代と個人差。前腕に視線を落とし、少年は息をついた。

「どうだ、何か分かったか？」

「うーん」

頭に血がる前に、ソニアはマークの観察を終えた。腕の力だけで、ダンデが彼女を引き上げる。

「思った通りだった。この崖崩れは、自然現象でも、事故でもない。事件だよ」

「そんな……」

ホップは息を飲む。ミステリードラマや小説のような事態に、理解が追いつかない。

「警察の皆さんの前で説明するわ。戻りましょう」

「おい、ソニア」

リザードンの背中で、二人の視線が絡む。ソニアの唇が小さく動き、兄が眉を寄せる瞬間を、ホップは見た。

「そうか、分かった」

「何が分かったんだよ……」

疑問がホップの口を突く。リザードンに指示を出すダンデの顔は、ポケモントレーナーというよりも、ポケモ

ンリーグ委員長のものだった。

「ワイルドエリアで発生した今日の災害は、極めて事件性が高い。オレはポケモンリーグの委員長として、ガラル警察署に捜査協力を要請する」

警察のもとに戻るなり声を張り上げたダンデに、警官は困惑を隠さなかった。彼らの気持ち、ホップには理解できる。

「二人だけで納得されても、こっちはちっとも付いて行けないぞ。きちんと説明してくれないと」

ホップの言葉と視線を、ソニアは大きく頷いて受け止めた。

「巨人の腰掛けの地震と崖崩れ。これは自然現象じゃなくて、ポケモンの仕業だ。事件性があるのなら、人間が関わってるってことになる」

「そうね。まず一つ目。このエリアのポケモンは、わざレコードを使わなければ、じしんを覚えない」

警察官たちが、真剣な顔でソニアの説明に耳を傾けている。

「じしんを起こしたのは、野生のポケモンじゃない。それは納得できる。でも、トレーニング中のアクシデントかもしれないだろう。大勢のポケモンが怪我したのに、知らんぷりは良くないけどさ」

「そこで私が気になったのは、このマークです」

ソニアはスマホロトムを呼び、ピンク色のマークを画

面に表示させた。

「ポケモン勝負において、じしんは必ず相手に当たるわざです。的を使うトレーニングの必要性は低い」

「だったら、なぜこんなものが？」

唇の乾きを自覚しながら、ホップは尋ねる。ポケモン博士の助手ではなく、探偵の助手にでもなった気分だ。

「わたしの仮説ですが。あのマークは、わざを使うポケモンのためではなく、指示を出す人間のために描かれたものではないでしょうか」

「的を描いた人間と、ポケモンにじしんの指示を出した人間は、別だってことか？」

「キミの考えが正しければ、ポケモンのじしんで崖崩れが起きたのは、トレーナーが原因ということになるが、証拠はあるのか？ ただの悪戯かもしれないし、芸術かもしれないぜ」

ダンデの口から飛び出した言葉に、思わずホップは笑い出した。兄弟揃って芸術に詳しくはないという自覚はある。

「芸術だったとしても、トレーナーから事情を聞く必要はあるでしょうね」

「ワイルドエリアには、大勢のトレーナーが出入りしています。その中から落書きの犯人を見つけるのは、難しいですよ」

警官の一人が、控えめに声を上げる。街のお巡りさん

の仕事を増やすことに罪悪感を覚えて、ホップはソニアに視線を送った。

「この件に関しては、トレーナーの特定に時間はかかるないでしょう」

「そうなのか？」

ホップの反応に満足したのか、ソニアは自身に満ちた穏やかな笑みを浮かべた。

「あのマークは、ポケモンの体液で描かれています」

「科学の力で鑑定するのか？」

刑事ドラマの鑑識官をイメージして、ホップは声が弾むのを抑えられなかった。マークを描いたポケモンが見つかれば、トレーナーを見つけるのも簡単だろう。

「ドラマじゃないんですから、科学捜査で何でも分かる訳じゃありませんよ」

事実を口にする警察官の顔に、諦めと慣れが滲んでいる。フィクションのような華々しい成果を期待しては落胆する多くの人々を相手にしてきたのだろう。

「確かに。科学は常に進歩していますが、万能ではありません。それに、時間も費用も限があります」

「それでもキミは、トレーナーの特定に時間はかかるないと言った。その根拠を教えてくださいませんか」

ダンデと視線を交わし、ソニアが大きく頷いた。「ドーブルというポケモンを、ご存じでしょうか」

「ドーブル？」

ガラル地方では、野生での生息が確認されていないポケモンだ。外国人アーティストの相棒として、筆のような尻尾を振るう姿を、ホップはシュートシティで目にしたことがある。

「確か、ドーブルの体液って、個体によって色が違うんだっただよな。それに、スケッチで別のポケモンのわざを覚えらるる」

地面にマークを描き、わざマシンを使わずにじしんを起こすことができるポケモン。重要参考人という言葉思い出したのは、ホップだけではなかった。

「ドーブルの仕業だとだとすれば、ピンクのマークは目印ではなく、縄張りを主張するためのものです。ピンク色の体液を出すドーブルとトレーナーは、このガラル地方には多くないでしょうから、絞り込みも難しくはないと思われます」

「防犯カメラや空飛ぶタクシーの利用記録は、警察でなければ調べられない。ポケモンリーグがガラル警察署に協力を要請した理由が、分かってもらえただろうか」

ポケモンリーグのトップに立つ者らしい、威厳に満ちた口ぶりでダンデは言った。リザードンの上で行われた短いやりとりで、彼がソニアの考えを理解しただけではなく、彼女の助けになるように話を誘導している。それは、勘や洞察力だけでは説明できないことだ。

ワンパチの鼻は、衰えてない。

救護テントのスタッフの言葉が、ホップにジムチャレンジャー時代のソニアを想像させる。彼女がワイルドエリアで、ポケモンやトレーナーの救助に関わっていたならば、行動を共にしていたダンデとヒトカゲも居合わせに違いない。だが、ジムチャレンジ中に巻きこまれた事故や災害の話を、ホップは一度として二人から聞いたことがなかった。

史上最年少チャンピオンの伝説、あるいは物語の間には、その輝きに埋もれたものが存在するのかもしれない。一人の王の威光が、もう一人の王と二体のポケモンを隠し去ったように。

「着信ロト！」

「失礼」

一同に断りを入れ、ダンデは通話を開始した。悪い知らせがもたらされたのか、徐々に険しさを増す声と表情に、ホップは不吉なものを覚える。

「ワイルドエリアへの立ち入りを管理する部署から、報告があった。巨人の腰掛けでキャンプを行っていた男性一名の安否が確認されていない」

崩れた岩に飲み込まれた地面の下には、その人物が埋まっているのかもしれない。捜索活動を行うレスキュー隊員に祈るような眼差しを向けることしかできなかったホップと違い、ソニアは冷静だった。

「その方は、保険屋さん？」

「ああ。安否不明のカイダラ氏は、マクロコスモス生命の社員だ」

警察官のどよめきを受けながら、ダンデは頷いた。